

「特別支援学級の現状と今後」

1. はじめに

私は、高校生の時にボランティアチューターを体験し、それがきっかけになり、大学生になってからも小学校で学習支援のボランティアをさせていただけるようになりました。大学に入ってからには主に特別支援学級に携わっており、そこでの体験から、私は特別支援教育の現状について考えたことがあります。

2. 子どもたちの葛藤と求められること

①K君の話

私はこのボランティアで、児童一人一人が葛藤を抱えていることを知りました。

例えば、K君は、特別支援学級一の暴れ者です。口が悪い上に、力も強く、気に入らないことがあると、すぐ他の子に暴力を振るいます。一見、彼が一方向的に悪いように思えるのですが、感情のまま他の子に手を上げた彼を叱ったとき、彼は「俺だって分かってるよ！でも、止められねーんだよ……」と言いました。私は彼にそれ以上何も言うことが出来ませんでした。彼も、それがいけないことだと分かっています。それでも自分の気持ちや感情をコントロールすることが出来ない。私には彼にしてあげられることが何も無い気がしました。

彼はとにかく口が悪く、クラスのボスの存在です。しかし、その彼も家では同じようなことを言われ、縮こまっていることしか出来ないそうです。彼の放つ一つ一つの言葉も、彼がいつも家で言われている言葉なのかもしれません。そう思うと、一概に彼が悪いと非難することはできません。しかし、家族が悪いというわけでもありません。K君の家族にも苦労があり、大変なことも多いと思います。特別支援学級で狭い人間関係しか知らない彼らにとって家族の存在は大きく、強く支えられているはずなのに、その存在が傷つきの連鎖を生んでいるのは悲しいです。私は、家族にも支えが必要だと思いました。

②家族について

特別支援学級にいる児童は、全員が最初から特別支援学級にいるわけではありません。むしろ、1年生の時からいる子のほうが少ないくらいです。大抵の場合、学級での様子、家での様子から判断し、途中から特別支援学級に編入してきます。編入するかどうかはもちろんです。学級での対応、協力学級との関わりの頻度などについて、学校側にほとんど決定権はなく、保護者の意見が一番力を持ちます。最終的な決定を下すのは家族です。

そこには様々な葛藤や苦悩があります。

私がボランティアに行き始めた年、小学校に、ある2人の女の子が入学してきました。Sちゃんは心臓に障害をもっており、Mちゃんは発達障害を抱えていましたが、2人のご両親は普通学級で皆と一緒に学ぶことを希望しました。他の子と同じように普通学級で学ばせたいという保護者の願いはもっともであり、学校側はそれを無下に拒むことはできません。学校は保護者が同伴することを条件にそれを受け入れ、2人に介護者を付けました。私は彼女らのいた普通学級でも学習支援をしたことがあります。2人は普通学級にはいるものの、同じクラスにいるというだけで、なかなか同じように授業を受けることはできていませんでした。そして翌年、2人は特別支援学級にやってきました。1年間普通学級で過ごしたことで、その限界をはっきりと覚えることができたのでしょう。結局Sちゃんは特別支援学級でも皆に遅れを取っています。来年からは養護施設に行くことにしたそうです。「遠回りしてもいい。遠回りして、普通学級や特別支援学級を通り過ぎたからこそ、Sちゃんのご両親は、ここじゃダメなんだと分かったのだから。納得しなければ親も前に進めない。Sちゃん達はそれでよかったんだ。」と先生はおっしゃいました。私は、特別支援教育の奥深さを知りました。ただ意見を押し付けるだけではダメなのです。保護者の方々の意見も受け入れていかなければ、皆前には進めません。特別支援学級は、障害児を持つ保護者が子供の障害を受け入れ、共に成長していくための場所でもあるのです。

特別支援学級では、一人一人を客観的に見つめ、いかに指導するか、適切な就学指導が求められてきます。同時に保護者の気持ちも考慮しなければならないとなると、特別支援教育はますます難しくなります。しかし、保護者支援こそ、今後の特別支援教育に最も求められることなのではないでしょうか。社会に、大人である、保護者を成長させる場、機会は少ないです。その穴を補うためにも特別支援教育は機能するべきだと思います。

3. 協力学級との関わり

①協力学級とは

私には、ボランティアを体験した中で一つ気になったことがあります。それは、協力学級の存在です。私のイメージでは、児童にとっても楽しみな存在なのですが、協力学級に行くのを嫌がる児童を見て、そのイメージに疑問を持ちました。特別支援学級の児童にとって、協力学級とはどのような存在なのか、また、どうあるべきなのでしょう。

協力学級とは、特別支援学級の児童を受け入れ、他の児童と一緒に共同学習させる場のことです。少人数の特別支援学級では、一人一人の発達に応じた指導を効果的に行うことができますが、その反面、集団からの刺激が少なく、マンネリに陥りやすい、社会性が育ちにくいなどのデメリットがあります。少人数で、しかもメンバーがほとんど変わらない特別支援学級では、どうしても狭い人間関係しか形成できません。そのため、協力学級はなくてはならないものです。しかし、その存在が彼らに少なからずストレスを与えているというのも事実です。

②協力学級の現状

私は、特別支援学級の児童と協力学級の関わりについての実態を知るため、夏休みに、協力学級で補習の授業を受ける特別支援学級の児童の学習支援ボランティアを行いました。私が見たのは5・6年生のクラスで、そこには、3人の特別支援学級の児童がいました。

補習では、各自が持ち寄った教材（主に夏休みの宿題）を解きます。分からないところは先生や私のようなボランティアに聞き、答え合わせ・丸付け等も個人で行います。そこで見たのは、理解のない同級生たちの姿でした。

特別支援学級のJ君のワークを見た、同級生は、「うわぁ、こんなの超簡単じゃん」と言い、その簡単なワークの問題を間違えてしまったJ君は、鉛筆を止めてしまいました。当然のことながら、J君はみんなと同じワークを解くことが出来ません。解いていたのは周りの子からみれば、簡単すぎる程の問題です。しかし、それは仕方のないことなのです。確かに平等ではないかもしれませんが、公平なことなのです。児童にはJ君への理解がされていないのでしょう。

特別支援学級ではいつも騒がしいK君もその日は大人しく、萎縮しているようでした。K君は、特別支援学級の生徒の中でも特に協力学級が嫌いです。自分がみんなと違うことが分かるそうです。だから協力学級がストレスになります。自分がみんなと少し違うことが判るというのは、それだけ障害の程度が低いということだと先生はおっしゃいました。障害の程度が高いほど自分や環境がストレスになるということではなく、むしろ低いほうがストレスになる場合もあることを知りました。確かに、協力学級と一緒に勉強させると学力と集中力の違いがよく分かります。K君はこれを感じているのでしょう。

③協力学級に求められること

私には、普通学級の児童は、彼らを同級生として、対等に思っていないように感じられました。それは理解不足が原因だと思います。

一緒にいるだけ、障害の状況に応じていない、一部の教科の補充になっているなどの状況だと、お互いのストレスになったり、リスクを背負ったりすることもあると思います。特別支援学級の児童にとって、障害のない子どもとの共同学習を通して相互理解を図ることは極めて重要であり、また、障害のある子どもにとって有意義であるばかりではなく、共同学習は、小・中学校等の子どもたちが障害のある子どもとその教育に対する正しい理解と認識を深めるための絶好の機会ともいえますが、協力学級の児童に特別支援教育の児童への理解がなすすぎるように感じました。「共に勉強をしていく中で、徐々に」なんて待ってはられません。特別支援学級の児童はその間にも確実にストレスを感じています。協力学級に行くことを嫌がる子もいるくらいです。

特別支援学級の児童を普通学級で受け入れるというのであれば、協力学級の児童から特別支援学級の児童への理解を得るため、彼らについてきちんと話をする機会を作るべきだと思います。理解できないまま彼らを協力学級に入れることは、お互いのストレスになります。これは児童が悪いのではなく、周りの大人達の責任です。これからは、障害のある人を隔離するのではなく、障害者と健常者が助け合いながら一緒に生活していく社会こそがノーマルであるとする、ノーマライゼーションの理念を児童にも考えてほしいです。ノーマライゼーションは、社会の縮図となりつつある学校で、未来を担う子ども達にこそ、考えていってほしいことだと思います。

今後の特別支援教育において、児童に対する適切な指導及び必要な支援だけでなく、普通学級の児童との関わり方、受け入れの態勢も重要な課題になっていくのではないのでしょうか。協力学級は、あればいいということではありません。理解を持って接し合える環境があって初めてその機能は働き、お互いに有意義な関わりができるのです。

4. ボランティアを通して感じたこと

彼らを助けてあげたいのに何もできない私は、自分がひどく無力で小さな存在に思えました。私は大学で福祉心理を専攻しています。福祉のこと、心理のこと、一生懸命学んでいるのに。実際の私は無力で、子どもたちに対し、何もできませんでした。そんな自分が悔しくて、虚しくて、悩んだとき、特別支援学級の先生に、自分も昔同じことで悩んだと

話していただきました。毎日毎日泣いてばかりだった、と。どうやって乗り越えたのか聞いてみると、ある日気づいたのだと言われました。「自分は彼らの両親ではないのだから、両親と同じように悲しんではいけない。毎日泣いているだけではいけない。私は私にできることを子どもたちにしてあげなければならないのだ」と。私たちは彼らの両親ではありません。今この一瞬、彼らのためにできることを精一杯してあげなければならないのです。先生にとってのそれは勉強を教えることであり、友達と仲良くすることや給食をおいしく食べることを教えることでした。なら、私にとっての「精一杯」はなんだろう、と、私はさらに悩みました。

私が救われたのはスクールカウンセラーの方に言われた、「何かしてあげようとしなくていいんだよ。彼らをそのまま受け入れて、受容してあげれば。そばで一緒に悩んであげればいいんだよ。それだって立派な支えになるから。」という言葉でした。その言葉で私は、一緒にいてあげること、そばで一緒に悩んで、そっと寄り添っていること、それが私の精一杯なのだと気づくことができました。

5. おわりに

私はボランティアを通して多くのことを学びました。学校の授業だけでは分からないこと、自分で気づかなくてはならないこと、大切なことを先生や児童からたくさん教えてもらいました。この体験が今後の群馬の教育に生かされ、特別支援教育がより充実すればと思います。